

《公開講座》

ドイツ連邦共和国国歌の作詞者 ホフマン・フォン・ファラースレーベンについて

佐々木 滋

はじめに

本稿は十二月八日の公開講座で述べたことの概要と当日配布した資料のことを、追加的なこともあるが補足的に述べてみたい。

インターネットが普及した昨近の情報収集は、まことに迅速なものがある反面、間違った、不用意な情報もみられる。とくに配布したホフマンのことの日本語版ウィキペディアでは、部分的にはあるが満足が得られない。ドイツ語版ウィキペディアを抄訳したものと思われる。写真などはカラー色を使って、いかにも本物らしくみせている。

限られた時間内で、詩人の出生地、ヤコブ・グリムとの出会い、シュレジアのブレスラウ大学での教授職の活動、と同時に詩人としての活動、詩集の検閲による『非政治詩集』の発禁などを紹介し、資料として中世に詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルワイデの「讃歌」と現在のドイツ国歌歌詞を並べて示した。ほかは解放戦争当時のドイツ諸邦国、ハノーファー王国がプロイセン王国に併合される前の図を参照に供した。終了まじかに質問があった。ヴァルターとホフマンの詩のことについて。またホフマンをゲルマニスティーク(ドイツ語・文学)の草分け的存在とする根拠など。聴講者からは少なくとも、こうした質問があったことには喜ばしさが感じられた。その応答でのことなども、以下の展開と翻訳で触れてみたい。

本稿は二つの部分からなる。後半はホフマンの簡単な伝記的な紹介に手ごろなものとして、旧東ドイツのレクラム版『非政治的詩集』のまえがきの翻訳を試みた。筆者は Maximilian Jakubietz 教授である。おそらく、一九五・六〇年代のいわゆる、マルクス主義・レーニン主義に忠実な St. Kyrill and Method University (Trnava) のゲルマニストにちがいない。こういう姿勢は、壁崩壊後に見直された。そういうことの意味においても歴史的なものがみられるに違いない。東独でも体制反対派は多く逮捕され、壁の崩壊後に刑を解かれた。出版人カントロヴィチュなどがあげられる。

国歌ないしは国旗について

ここで論じようとする一国の国家讃歌と国旗という、いわば一国の象徴をあらわすものの成立と

歴史は、一国の歴史的観点を視座に据えることで理解を深めることができる。その一国とはドイツ連邦共和国のことであり、近代国家の成立までの道のりと、その後の道のりをたどり、その間に、ひとりの詩人がどう生きたかを略述してみたい。まず国家讃歌とは、周知のごとく、国をたたえる祝いの歌でもある。そのテキストが楽譜上の歌としても歌われる。讃歌の成立はたかだか十八世紀であり、国旗同様、一国の独立の公的象徴となった。

ドイツが抱えたさまざまな困難こそが、豊富な視点ゆえに授業などでテーマ（国歌と国旗）としては、おもしろいものがあるようで、「ドイツの歌（Deutschlandlied）のテキストと成立の歴史は、高等学校の歴史授業で、十九世紀のナショナリズム・リベラリズムの運動の扱いにあたって取り組めるものである。この場合、一九二二年に大統領エーベルトによる国歌導入、ナチ時代に歌詞一番の政治的濫用、歌詞一番の引き起こした政治的不信と誤った解釈に注意を向けさせなくてはならない。」^{A-p.5)}

中世吟遊詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ（以下、ヴァルターと呼称）とホフマン

ドイツ人のうた＊

ドイツよ ドイツ 世界に冠たる ドイツよ
攻めるも衛も
兄弟のように
まとまれば
マース河からメーメル河に至るまで
エチュ河からベルト海峡に至るまでは —
ドイツよ ドイツ 世界に冠たる ドイツよ

ドイツのご婦人 ドイツ人の誠実
ドイツの葡萄酒 ドイツのうた
その 古からの 美しい 響きを
この世界に保ち
われらを 高貴な 行動へと
全生涯 にわたり 導くよう —
ドイツのご婦人 ドイツ人の誠実
ドイツの葡萄酒 ドイツ人のうた

統一 正義 自由を
ドイツ人の 祖国 のために
われらをみな そこへと努めさせん
こころと 手を 兄弟のように 携えあつて
統一 正義 自由とは

讃歌
諸君、歓迎してくれませう、
わたしは諸君に、青報をもたらす者
諸君がこれまで聞いたことは
みな取手に足らぬ詳細な事でも、さういふ
しかし、それにはお礼がいります。
その諸君が釣り合うものなら、
お礼に値することが申し上げられよう。
贈り物には何がいか、とくくり贈答のほど
を。

ドイツの婦人たちは、
彼女らがますますみんな好かれるような、
そんな歌をいささしやう。
どんな歌があるのかって？
これには大したお心づかいはいりません。
あの人たちは高貴にすぎます。
分を知ったわたしが、あの人たちに願うの
は、やさしい言葉をかけて下さること、ただそれだ
け。

わたしは、あまたの関々も見
点交方々の事どもも好んで観察して歩きました
だからといって、もしもわたしが異國のしきた
りを
こころ、おのが心にかなうように、
しむけでもするようにならねばならぬ
諸君の身に知りますように。
聖書を言いつてみたとして、何になりましょう
ドイツの私撰作法は、他のどの関にもまさって
いるのです。

エベ河からライン河
さきには、この世で知った限りの
最も高貴な人びとが、住んではいますが、
すぐれた華奢と容姿を
見かけるこの眼に、狂いがなければ、
神がけて響きます。ドイツの関の女人の方が、
何処の関の婦人たちより、すぐれていることを。
ドイツの男子は、教養高く、
女人はあたたか、天徳のよう。
彼らをそしめる者があれば、その人は恐ろされて

いるのです。
そうとしか、思いようがありません。
気高い心ばえ、高らかな姿を
見たいと思われたい人があれば、
われらが関へらつしやう。ここには喜びがみ
あちでいます。
どうかいつまでも、わたしがこの関に生きたが
らえられますように！

長く、わたしが仕えて来た人
また、いつまでも仕えたい人
わたしは決して、その人の許を離れはしません。
それなのに、その人はわたしをこんなにもいた
ましめ、
わたしの胸と心を
痛つけることができるのです。
あの人のこの誇った仕打ちを、捨て、許しま
す。いつの日か、あの人が思い直してくれることも
あります。

ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ

幸福の 証 —

この幸福の輝きのなかで 花咲くがよい

花咲くがよい ドイツ人の祖国よ

*Das Lied der Deutschen (以下、リート・デア・ドイチェンと略称) 成立は26.8.1841 ヘルゴランド島。ワイマル共和国から現在に至るまでのドイツ国歌歌詞(讃歌)

ヴァルターは中世の大詩人であり、高貴なご婦人方にひたすら愛(ミネ)の詩を捧げる遍歴詩人たちのひとりである。ヴァルターは身分の低い女性にも愛の詩をささげる。坐って足を組み、頬杖をついて世の中のことを考えて詩を作っている。ホフマンはそんな姿を自分に生き映していたかもしれない。わざわざ、ヴァルターの「讃歌」を対比させたのも、ふたりがドイツ諸国を渡り歩いた詩人であったからである。「リート・デア・ドイチェン」の一番の地名は、河川の名称で、マース河はオランダを流れ北海にそそぎ、メーメル河はかつての東プロイセン北部を流れ、リトアニアにあるバルト海にそそぐ。エチュ河はイタリア北部からアドリア海にそそぎ、バルトはデンマークのユトランド半島東部とキール湾のあいだの海峡をいう。この第一節(一番)が、その勢いのよさのあまり、闘いのうたであったり、行進に使われたりする。のちにそのことにも触れたい。

国歌と国旗にまつわるドイツ小史

一七八九年の数年前、クリストフ・マルチン・ヴィーラントは、政治的に統合されたドイツ国家なる空想的社会像を、自らの国家概念とともに、こう述べている。

“ドイツの邦国を注意深く歩いてみると、たしかにオーストリア人、ブランデンブルク人、プアルツ人、バイエルン人、ハッセン人、ヴェルテンベルグ人等々と知り合うが、ドイツ人なるものには行き合わない。全ドイツ諸邦でむなしくゲルマニアを探し求める。(…)諸邦のこの途方もない数の国々のいずれもが、独自の共有精神を有し(…)普通の国民的関心にたいする冷淡と無関心が(…)よそのものに、ドイツ人の特徴だと注意を引くとき、それはありうべからざることである。”A-p.124)

革命を経たフランスには、個人の要求を保障する自由な国家、平等、博愛の精神をうちたてる姿勢があった。ドイツでは、諸邦と国家の嵩じつつある一致がいまだに欠けている状況であった。この場合、^{Nation}国家とは民族的、言語的な人間間の類似性をもって特徴づけられ、^{S t a a t}領邦国家とは、一八一五年のドイツ連邦が生まれた時点では、皇帝国(1)、王国(5)、選帝国(1)、大公国(7)、公国(10)、侯国(11)、自由都市(4)からなる、多かれ少なかれ影響力のある独立した諸領邦国家を形成するものである。ここで注意したいのは、これらの諸領邦国家から最終的にはオーストリア帝国がプロイセン王国と戦争し、オーストリア帝国が統一ドイツから除外されることになる。それまでオーストリア帝国は、ハプスブルグ王朝の威光をかざす唯一の皇帝国であった。ハイドン作曲の皇帝讃歌は、もともと皇帝ヨセフにささげられたものであったが、これがこんどは、その曲にホ

フマンの詩がのった形が、現行のドイツ国歌となった。ホフマン作詞の第三番、「統一、正義、自由」は祖国のためにではなく、ドイツ人の祖国のためである。

対ナポレオン解放戦争の開始頃作詞されたエルnst・モーリッツ・アルントの「祖国ドイツ」が闘争歌になって、祖国という概念も意識されるようになった。それが《全ドイツ》、《国家》として政治的に形成されたものが意識されてゆく。進歩層ではこの歌がかなり支持されていた。ドイツ国歌の三色旗は上から黒・赤・黄金の諸色である。この旗が最初に用いられたのが、一八一五年イエーナの大学生による全ドイツ学生組合の創設に由来するものである。これは各大学に広がりを見せた。一八一七年は、ライプチヒ郊外の対ナポレオン戦争勝利、四周年の祝賀ムードのなかアイゼナハのワルトブルク祭がワルトブルク城でドイツ各地からの学生が集まって、統一と自由を政治的的要求として掲げた。かれらが持つ旗の色が、一八四八年と四九年のドイツ革命の旗の色となるのであった。フランクフルトの国民議会のあるエッセンハイマー・ガッセ沿道には皇帝ヨセフを歓迎するときなど飾られていたという。この三色旗はドイツ連邦からのプロイセン離脱に反対する諸邦と、とりわけオーストリア帝国の結束のシンボルとしてももちいられる。のち、双方二十万の兵を交えたケーニヒグレーツでオーストリア軍は敗戦をむかえる。

対デンマーク戦、対ナポレオン三世戦に勝利してドイツ帝国が、ヴィルヘルムを皇帝としてビスマルクを宰相にかかえ誕生する。

二十年以上も、諸邦統合の成果のない、下からの革命的試みを、上からの統合をビスマルクが一八七一年にやり遂げたとき、ドイツ帝国の色は黒・赤・金とはしないことに一致する。それには余りにも市民的、リベラルな自由戦争と統一戦争のにおいがあり、あまりにも自由な国民の意思シンボルでありすぎるからだった。《市民的な大統領》グスタフ・ハイネマンは、一九七一年一月十七日の建国百年祭によせてのテレビ中継演説で、自国の歴史に批判的論調を述べた。“ビスマルクは、たしかに《鉄血》にてドイツの統一を達成したが、国民の統一とともに民主的な自由を望む黒・赤・金を掲げた先輩たちの系列下にはない。”と述べている。この旗の色の意味は名誉、自由、祖国だとか統一と自由であるといわれるが、詩人フエアディナント・フライリヒラートは詩「黒・赤・金」(ca.1848)のなかで、黒は火薬、赤は鮮血、金は黄金の焰だとうたう。

ドイツ帝国は、諸侯の認めた統一ドイツであり、その支配者は〈神の恩寵〉による皇帝である。帝国国旗はプロイセン王家の色、白・黒でありハンザ都市の赤で補う。すでに一八六七七年の北ドイツ連邦(関税同盟)成立をもってこの組み合わせ色が用いられた。国歌なるものは王室讃歌であり、諸邦の地域を歌ったものがあつたりで、国歌という重さのあるものはないといえる。強いて言えば「ラインの衛兵」だろうか。

「ラインの衛兵」の歌は明治末期に日本を訪れたドイツ人作家B・ケラーマンが自国の歌として披露している。ホフマン作詞の『リート・デア・ドイチェン』の第一節の歌いだし「ドイツよ、ドイツ、世界に冠たるドイツよ」は一八七〇年/七一年の対ナポレオン三世戦の戦勝歌として歌われたようである。『ラインの衛兵』にとって代わってホフマンの歌詞が人々の間に浸透していった。だが第一節の歌いだしに対して、一八六七七年フランス国民議会の軍事事案討議のうちに、代議員Liegeardは〈このような歌をうたえる国家は、節度のなさを表している。〉と述べる。そうした批判に対しホフマンは、〈たとえ、ドイツ以外の世界中がそれを不愉快に思っても、この歌は正当に歌われ得るものだ〉とある手紙の中でのべている。

ワイマル共和国誕生一年目、一九一九年五月十二日のワイマル国民議会議長コンスタンチン・フェーレンバハ（中央党）は声明を読み上げる。〈幸福な日々のように、いまこの厳かなひとときに、われわれはわが祖国の讃歌を信じていることを認める。それは曲解され、他民族への優越を示すものである、と言われたりした。決してそうではない。その讃歌はわが祖国への内的、心情的な愛情の表現にすぎない。それは、われわれの父たちの国への敬意の表現である。〉このあと、ドイツ国民人民党から社会民主党、独立社会民主党にいたるまで、全員起立し、そしてみな一緒に“ドイツよ、ドイツ、世界に冠たるドイツ”を歌ったのである。

一九二二年八月十一日に、その歌の成立八十年目にしてようやく『ドイツ人の歌』^{Lied der Deutschen}は、初代ワイマル共和国大統領フリードリヒ・エーベルトによって、最初のドイツの共和国の公的國家讃歌に決定されることになる。エーベルトは祝辞のなかで自分の選択についてこう述べる。

“統一、正義、自由！ 詩人の愛に由来するこの三和音は、諸邦の四分五裂と抑圧の時代にすべてのドイツ人の憧れを表現した。その歌は、いまでもなお、より良い未来へのわれわれの厳しい道を護衛する運命にある。不和と気儘に反対して唄われ、彼の歌は政党間の争いで濫用されるべきでなく、突き付けられたものの闘争歌になってはならず、また国家主義的な思い上がりの表現として用いられるべきではない。それでも、かつての詩人のように、われわれは今日、「世界に冠たるドイツよ」を愛してやまないのである。かれの憧れを満たし、黒・赤・金の旗のもとに統一・正義・自由の歌は、われわれの祖国の感情の定まった表現でなければならない。”^{A-p.13}

このエーベルトの試みにさえ反対の動きがあった。美化された血と大地の神話のひとつに、第一次大戦は西部戦線の前戦 Yser 運河あたりで英・ベルギー連合軍と闘ったとき、「リート・デア・ドイチェン」の合唱下に歌って、前線突破したというものがあつた。戦場の霧は濃く、音響的な合図としても使われたらしい。敵国イギリスの「God save the King」と「月桂冠に栄光あれ」は同じメロディーであつたため、ホフマンの歌をつかつたのである。

社会民主党の共和国大統領が、保守側に好まれていた歌を國家讃歌としたことに違和感を抱くかもしれない。労働者運動も盛んであつたし、伝統的に階級闘争の歌もある。労働者の歌集にさえホフマンの「リート・デア・ドイチェン」（「ドイツ人のうた」）はみられない。このことは社会民主党を保守とする、共和国安定のための政治的力学の貢ぎ物かもしれない。このワイマル第一共和国讃歌にナチ党が問題すら抱かなかつたことは、歴史のにがい皮肉だといわれる。国家社会主義者らは、議会民主主義は党派間の喧嘩だとし、共産主義者、社会民主主義者は世界革命の使者、ボルシェヴィズムのエージェントだと嫌い、また批判的文学、詩、新聞文化、近代芸術はユダヤ的ボルシェビズムの落書きだ、頹廢だ、としながらもこの讃歌の一番を、かれらの世界権力の要求と傲慢な理想の人種認知の要素として利用したわけであり、国家社会主義イデオロギーにうまく適合したのである。政權掌握の年、一九三三年三月十二日、戦役将兵慰霊の日に、老大統領ヒンデンブルクは次のように命令した。

“わが国戦没者の榮譽のため、古くからの黒・赤・金の反旗を全国で掲げる今日という日に、わたしは、明日からドイツ国の色が最終的に決まるまで、黒・白・赤と鉤十字旗と一緒に掲揚しなければならないことを決定した。これらの旗は、ドイツ帝国の誇りある過去とドイツ国家

の力強い生まれ変わりとを結びつけるものだ。それらは国家の力とドイツ国民のすべての国家的輪の内的むすびつきを具体化するはずである。”^{A-p.14)}

こうしてラジカルに黒・赤・金は破棄される。学生結社、市民革命、統一のための憲法保障、政治的リベラル化（民主化）等々のために戦った旗は、ナチズムの伝統理解に合致しなかった。

「リート・デア・ドイツェン」の一番に続いてホルスト・ヴェツェルの歌がSA（突撃隊）の闘争歌として歌われる。ヴェツェルはベルリンの突撃隊員で殉教死するが、ゲッベルスはそれをプロパガンダで使う。一九三三年三月二七日、バイエルン州は、ほかの諸州に先駆けて、ホルスト・ヴェツェルの歌を国家讃歌の一部とする、と表明する。当時のバイエルン州文化大臣ハンス・シエムは、“この歴史的な重要さに達した歌は、バイエルン州の全ての学校で「リート・デア・ドイツェン」と並んで歌われなければならない。”^{A-p.16)}と述べる。

「リート・デア・ドイツェン」は行進でも歌われ、国家的に公認され、とりわけ情緒的雰囲気づくりに、国粋主義的な集合意識と意思の掌握に用いられる。一九三七年八月一日プレスラウでのヒトラーの演説は、〈我々ドイツ人にとり、最も神聖だと思われる、他ならぬこの歌もまた偉大な憧れの歌なのである。他民族には理解できないものだ。かれらは、この歌をどこか帝国主義的だと決めつける。……〉^{A-p.16)}というものであった。

敗戦はドイツを東ドイツと西ドイツに分かつことになり、西ドイツは米、英、仏の戦勝国によって管理される。公の場で旧国歌を歌うことは占領国によって禁じられる（一九四五年）。しかしはやくも、一九四八年ヴォルフスブルクの政治集会で歌われたのである。一九四九年西ドイツ基本法（22条）では国旗（Bundesflagge）だけが定められた一九五二年には「リート・デア・ドイツェン」の第三番のみを歌うことの合意が、大統領ホイスと首相アデナウワーの間でなされる。一九九〇年三月に連邦憲法裁判所は、第三番だけが刑法上守られることに決定したのであった。

東ドイツの場合、国歌はハンス・アイスラー作曲、J・R・ベツヒャー作詞の『瓦礫からの復興』が一九五〇年に指導部によって決定されている。東西ドイツの国旗の色は、ナポレオン解放戦争とドイツ学生結社に由来する、黒・赤・金は共通しているが、東独はその三色を背景に麦の穂とコンパス定規のデザインを加えている。これは東独が労働者と農民の国であると法に明記していたからである。（未完）

〔翻訳〕

ホフマン フォン ファラースレーベン著 『非政治詩集とときの詩』 の諸言 ^{B-p.3～14)}

Maximilian Jakubietz
マクシミリアン・ヤクビーッツ 著（佐々木 滋 訳）

アウグスト・ハインリヒ・ホフマンは、一七九八年四月二日、ファラースレーベン（当時はハノーヴァー選帝侯国）にて生誕する。父は商人であるが、市長職にも就いた。父の意向でこの息子は一八一二年までファラースレーベンの小学校に通う。ギムナジウムはヘルムシュテットであった（一八一二～一四）。大学入学まえの準備期間にブラウンシュヴァイク滞在中、はやくも一六歳で作詩を試みる。文学への刺激は、テオドル・ケルナーの詩『リラと剣』を読んだことによるという。

フランス軍の撤退後、ホフマンは来るべき “喜びに満ちた時代” を歌で讃えるが、しかしすぐに、異国のものからのドイツの解放が、人々の解放を意味するものではないこと、むしろ反動貴族がむ

かしの優位をふたたび強引に我が物にしてしまったことを、やがて突きとめるのである。

(…) 一八一六年春、ホフマンはハノーヴァー国立ゲッティンゲン大学に神学を学ぶために入学。だが、古典古代へのひいきが、彼をやがて神学から遠ざけ、文献学(言語学)へと転向させる。しかし、この段階では、まだ自分の本来の生涯の課題は不明なままであった。そこからヤコブ・グリムとの出会いがあった。グリム兄弟は、ゲルマニスティーク(ドイツ語学・ドイツ文学)とドイツ古代研究の創始者である。この出会いが、その後のホフマンの発展に決定的なものとなる。カッセル、テューリンゲンの森を抜け、イエーナさらにマゲブルク、生まれ故郷を通して再びゲッティンゲン戻った徒歩旅行の途中、カッセルの図書館で一八一八年にヤコブ・グリムと出会ったのである。この出会いの二人の会話に

“ヤコブと一緒に階段を上ってゆくとき《わたしはいま、オランダの文学に強く惹かれており、また後にはイタリアとギリシャに旅行しようと思っています。そこで古代芸術の遺物を研究するためにです。》という、《あなたには自分の国の文学のほうが身近なのでは?》と言われ、それ以後、自国のドイツ語学・文学の研究の道にすすむ決心が付いたのであった。ヤコブは、このことを心から愛情をこめて私に言うのであった。私は今でも、この一八一八年九月五日のヤコブの言葉を覚えている。ドイツ語学、ドイツ文学史と文化史、この祖国の学問のために、と旅行中に決心したのであった。その出会いの瞬間にわたしは誠実であった。”

カッセルからのその後の旅でホフマンはイエーナへ行き、そこでは自然哲学者のオーケンと知り合う。かれは百科全書的な雑誌『イシス』の発行人でもあった。この有名な自然科学者・教授との出会いは、興味を掻き立て、教養に富んだ、たのしいものであった、という。ホフマンはこの心を開いてくれた教授に窮状を訴えると、この飢えた学生にささやかながらの援助を惜しまなかった。ホフマンの百以上もの二行詩を雑誌『イシス』に載せてくれるのであった。

“これらの全てのエピグラムは当時のドイツの状況、とりわけハノーヴァーでの状況に関連づけたものだった。素材となるものは十分にあった。学生や教授たちの世界など、俗物的なもの、古くさいものが芽生え、すでにまたわれわれの国家、仲間たちの生活の中で花咲いていた。多くの頭脳と権力は、古き良き時代を再び活気づけ、そしていかなる抵抗をも国家に逆らう危険なもの、と吹聴するもろもろの不満にかかわっていた。”

“イエーナで私にとって最も面白かったのは、オーケン教授であった。”と自伝で述べる時、“だからイエーナの学生生活は、なんといっても《自由な》ものに注意を向けられなければならなかった。” 学生結社(一八一七年十月一日ワルトブルク祭)の中心地であるイエーナでは《連帯感》がとりわけ保たれていた。このことが徒歩旅行をするホフマンに強烈な印象を与えたのである。この頃、ちょうど生まれたばかりの学生結社へのホフマンの共感是非常に大きいものがある。彼は自伝のなかで、“わたしはこの学生結社の理念に魂を吹き込まれた。あれやこれやの幾多の学生結社に所属するわけではなかったが、それ以上に…”と述べている。

父親の死後(一八一九)ホフマンはボン大学へ移る。彼はオランダ語を学び、民謡の熱心な蒐集

家でもあった。彼の研究熱心さは、昔の人たちの手稿および印刷物に向けられた。ドイツ語圏に限らずオランダ、フランスなどこの図書館であれ直行して探し回った。旅をして巡りまわることは、幅広い詩の創作にとり、ことのほか重要なことであった。この旅行と徒歩旅行によって最も重要な出来事に方向を定め、ドイツの進歩的な力へのよき結びつきを持てたのである。ドイツをめぐる国家的開放戦争に功績のあった有名な女史、紳士たちとの交友で最大限の社会的展望を手に入れた。例えば、ホフマンのベルリン滞在（一八二二）はこのことを生き生きと伝えている。モイゼバッハ家で識り合ったお歴々は、グナイゼナウ、クラウゼヴィッツ、ヘーゲル、アヒム・ベッティーナ・フォン・アルニムなどであった。自伝では、“モイゼバッハ家では有益な、刺激的な学問的歓談や素晴らしい図書館の利用などが、私に許されていた。親しみある家族との交流、そして多くの有名な女史・紳士らとの面識を得たことだ。”と述べている。

一八二三年の二十五歳のとき、A・H・ホフマンはシュレジアのプレスラウに移る。当地で図書館の専門職（クストス）を世話されたのである。かれは幸運にも優遇された司書にして、業績のあるゲルマニスト、若い研究者としてほぼ二十年間この地で暮らした。

彼が図書館・資料館などで発見したものにはいろいろとある。まず十一世紀の詩的な地誌の断片である。彼はこれを『Merigarto』というタイトルで刊行する（一八三四年プラハ）。そしてヴァランシエンヌの図書館では古高ドイツ語の『ルートヴィヒの歌』を発見し、これを一八三〇から一八三七年に互って『ドイツ語学史とドイツ文学史のための宝庫』と題して刊行し、さらに一八三六年から一八四〇年までには、モーリッツ・ハウプトと共同で『古ドイツ草子』を刊行する。さらに『ライネッケ キツネ』（一八三四）、『ドイツ文学・語学研究概要』（一八三六）、『ルター時代までのドイツ教会讃美歌史』（一八四二）、『シュレジアの民謡とメロディ』（一八四二）などでも蒐集を行った。

一八三一年からホフマンはプレスラウ大学で非常勤の教授として講義を持つこととなる。一八三五年末には大学内での人的敵対関係があったにもかかわらず正教授となる。このことに関しても自伝では、

“すでに一八三六年一月九日に評議会に呼ばれて、私を仲間にはしたくなかったであろうその人から、同僚として歓迎のあいさつを受けた。”（一八二二～一八三六 自伝）

イエーナでの学生結社の活動力、ザントによるコツプエの暗殺（一八一九年三月二十三日、マインツ）、それにリベラリズム・民主主義の代表者の度重なる、さまざまな場所での登場など一切が、メッテルニヒの大いなる狼狽を引き起こすことになる。かれは反撃へと変わっていく。学生結社・組合は禁止され、諸大学は監視され、F・L・ヤーン、E・M・アルントなど一八一三年の民衆蜂起の呼びかけ人を逮捕した。一八一九年のカールスバート決議になる暗い時代がドイツを覆い始める。

こうした政治的緊張下に、勇敢に決然と、反動に対して批判的な詩人へと発展を遂げてゆく。一九世紀の詩人でホフマン・ファラースレーベンほど民衆の中で幅広い発展を遂げた詩人はいない。とりわけ、子供たちの世界においても同様である。今日でもその名前は知られずとも、どれほど多くのホフマンの歌が唄われていることか。

ともかく、彼がドイツ国歌「^{Deutschlandlied}Lied der Deutschen」の作詞者であることは今日でも知られている。

この歌は、ドイツの反動に対する闘いの中で生まれ、のちに盲目的な愛国心だと判断されたり、そのことで価値を下げられたりしたものである。だが、ホフマンがほぼ二百もの児童歌を作詞したことをどれだけの人が知っているだろうか。少しだけ挙げてみるだけで、ここではよく知られ、好まれて唄われたものがある。『一番かわいい仔羊をもっている人はだれ?』、『小鳥たちはみんなやって来た』、『おゝ なんと寒くなったことか』、『冬よさようなら』、『カッコーカッコー森から歌う』、『森の小人』、『あすはサンタクロースがやって来る』などなどである。(訳注:日本でも多く知られ歌われている)

今日まですべての人々に好まれて歌われているこの歌詞への人気、この詩人の人気に対する最良のものさしである。全ての彼の芸術的モチーフは深みが感ぜられ、こしらえもののようではない。このことは、彼の作になる児童歌だけでなく、彼の愛の歌にも同じくあてはまる。(『もし私が小鳥なら…』ほか)

彼の『非政治的な歌』(一八四〇)の成長とともに、ホフマンは新しい道へ踏み出す。彼の特別な注意は公の物事であった。彼はヴィーン会議(一八一五)以後のドイツの政治的状況を学び、封建的な絶対君主主義の強化を正確に知ることとなる。

当時、ドイツの小市民社会に広がる反対派の世論は、徐々にこの詩人をとらえて離さなかった。彼は反動に対して闘い、経済的な遅れに対して、またドイツ諸邦の政治的四分五裂に対しても闘うことになる。

すでに早くから、かれは親しい仲間たちの間で一八三〇年、四〇年代のドイツの一般的発展、良からぬ社会状況への怒りをひそかに明らかにしていた。こうして自分の詩を一巻で発行するためにまとめ始める。彼の友人たちは、そうした計画の危険性について、彼に注意を促すのであった。なぜなら《政治詩集》だからである。そういわれても、ホフマンは怯まずに、むしろ自分の詩集を匿名下に『^{unpolitischen Lieder}非政治詩集』として刊行する決心をする。この着想は、ホフマンと同じくゲルマにストである、ヴィルマールと一緒に散歩中に思い付いたのであった。二人の会話のなかで “詩的な方法によって好転が開かれるちょうど良い時機が来たのだらう” と彼は言う。

四十歳代のこの詩人にとって、ますます必要となり、遂には実行に移したこうした望みから、ホフマンが自ら文学作品、芸術一般に、社会の意識改革にあたって決定的な役割を付与したのだ、とわれわれは誇張することなく、結論付けることが可能である。

ひとつのとても高い認識に達するために、この詩人が残した方法を自らが最もよく述べている。

“私の政治的見解は、その間に完全に祖国^{Vaterlande}に向いた。…その間に私は、われわれの諸状況が、どうであったか、どうあらねばならないか、どうあり得るのかを明らかにするために、熱心にあらゆる歴史的、政治的、そればかりか統計書までも読み耽った。このように私は詩の素材と提起された問題を得た…。ほぼ毎日詩作し、もろもろの新しい詩を、ときおり私を訪ねた友人、知人のいるまえて披露した。そんなときかれらが喝采すると、私はこう言ったものだ。〈これを絶対、印刷するつもりだ〉、と。そうすると、かれらは不安になって、それはやはり面倒だ、と言うのであった。しかし私は迷わされることはなかった。おそらく、外ならぬかれらの気懸りこそが、まさしく新たな作詩へと駆り立てたのだと思う。”

だがしかし、詩人が解釈しなければならない最終的にして同時に、最も困難な課題とは、検閲に

詩集をくぐり抜けさせることであった。

そこですでに述べたように、現実には幸運な思いつきが浮かんだのであった。

“私が思うところでは、何かを検閲で通すことは難しい。配布物をしばらくの間、警察から守ることも。さてよ！ この詩集は『非政治詩集』という名称にしよう。”

一八四〇年三月十六日に詩人はその原稿をハンプルクの出版人ユリウス・カンペに送る。何ゆえにホフマンがハンプルクのカンペ社に直ちに頼ったかの理由は、詩人自ら手短にこう伝えている。

“私がなぜ、よりもよってハンプルクのあなたのところに来たのかの理由は、あなた自身が容易にお解りいただけだと思います。それは私が北ドイツの人間であり、プロテスタント教徒であり、生まれながらのハノーヴァー人でありそしてプロイセン王立国家公務員であるからです。”

カンペ出版は、『非政治的詩集』の第一版を一八四〇年に、第二版を一八四一年に刊行した。詩人がこの詩集『非政治的詩集』で巻き起こした^{センセーション}評判は前代未聞なものであった。この詩集の影響範囲は非常に広いものがあつた。その理由は、どの真なる愛国者も切望すること、すなわち、ドイツの民主的統一を、詩人は単に言い表し、要求しただけであつたからである。

活動する市民としてホフマンは貴族と闘う。「キリスト生誕以後、一八四〇年貴族新聞」、「不釣り合いの結婚」、「七つの事から」

政治的反動に対しては「ヴィーン会議の最新情報」

敵もしくは臆病者として権利と幸福のための闘いで正体を現すもの、「二重の顔を持つヘルンフト派のひと」、「^{決して後退せず}Nunquam retrorsum」

しかし、とりわけ詩人は小邦分立主義を非難し、祖国の自由と統一のために、つねに至る所で登場した。「右翼的なもの、左翼的なもの」、「一つにして全て」、「祖国の薔薇の冠」

ハイネと同じように（「ドイツ冬の旅 I-9」）ホフマンは地上での自由、平等、至福のために闘う。「静かなミサ」、「シナ人の秋の歌」

詩人はいかなる扇動にも反対し、ドイツ分断者の決まり文句にも反対する。「愛国主義」

詩人の特別な嘲弄は俗物に対して「愛国主義者」、「酒場のベンチから」、「ロココの信仰告白」

時代の要求、日々の要請に盲目である者は詩人によって現在を想起させられる。「ヒューマニズムの学び」

とりわけ詩人が憎むのは、ドイツ人の卑屈な隷属根性である。「畜生票と単独票」など。ここでは再びハイネの「ハルツ紀行」のクラウス・タールの鉤抗を思わせるものがある。

ホフマンは《気まぐれ》とも闘う。彼は誠実な人間には、党派に与することを求める。「実りのないもの」、「善なる意志」

惑溺に耽るような月並みな芸術と情熱的に闘い、自由な芸術の展開のために尽くす。「自由な芸術」 などなど枚挙に遑がない。

ともあれ、『非政治的詩集』第二版の刊行一年後に、この危険な詩人にして大学教授が、プロイセン国王にとって耐えられぬものであることが突きとめられる。以下の決定は国務大臣から発せら

れたものである。(国王の確認は一八四二年十二月二十日)

“この詩集の内容は、全く非難すべきものとして認識されなければならない。この詩のなかでドイツもしくはプロイセンの公的・社会的状態が幾度も辛らつな嘲弄をもって攻撃され、愚弄され、そして軽蔑されている。心情と見解が表現され、この詩集の読者において、とりわけ、若者の世代により、物事の既成秩序への不満、君主と当局に対する軽蔑と憎しみを呼び起こしたり、さしあたりは、若者に、しかし一般的にはただ、有害に作用し得る精神を呼び起こすことが具備されている”(自伝 三二九頁)

ホフマンは大学教授として罷免され、『非政治的詩集』の詩人として追跡を受ける。だが、この故郷のない追われた詩人は、至る所で嵐のような歓待をうける。政治的に心の開かれたすべての人々は、かれの中に抑圧されたものの克服者を見出し、進歩のための闘士を見たのである。

リベラルな考えをもつ市民、青年、とりわけ進歩的學生結社など、要するに、ドイツ民族の最良の力がこぞってこの自由な詩人の周りに集まったのである。放浪遍歴する吟遊詩人にも似て、ホフマンは、町から町へと移り、自分の詩を集まった支持者のまえで朗読すると、歓喜の音が嵐のようにどよめいた。かれは国民の啓蒙家となった。連邦各国の役人たちはみなかれに嫌がらせをした。なぜなら、国民を思考へと刺激し、活発にひとつにさせたからである。さらに、かれはドイツ統一のための人物であり、自分の祖国を何にもまして愛してやまなかったからである。自分の詩的活動を、自分にとっても困難な時代に中断することはなかった。

以下の政治詩はそのときの雄弁さを証言している。

- ・ スイスからのドイツの歌 (一八四三)
- ・ ドイツ路地裏の歌 (一八四三)
- ・ ドイツサロンの歌 (一八四四)
- ・ 五月の酒 (一八四四)
- ・ ホフマンの滴り (一八四四)

このような、ときの詩もまた、非政治詩集として問題であった限りは、これらの(「あれかこれか」、「愚直善人頌歌」、「ドイツ俗物歌」、「われらの合図」、「自由の歌」)いくつかの詩も集会で影響を与えたに違いない。それらは共同社会の意識を作り直すのに、あきらかに、一役買ったのである。

詩人は一八四八年の出来事に感激して歓迎する。ハムバッハー祭が先行して行ったような(一八三二年五月二七日)大規模で力強い国民運動による国家の問題の解決を期待していた。しかし、やがてホフマンが認めなければならなかったこととは、将来、ひとつの自由で統一した民主主義のドイツで生活し、作り上げる自分の希望が実現されえない、ということだった。なぜなら、ドイツのブルジョワジーは(押し進むプロレタリアートを恐れるあまり)反動勢力と結託し、労働者階級と敵対してしまったからである。これは一五二五年に農民たちに逆らって戦った都市市民階級と同様なものがある。これはF・エンゲルスが『ドイツ農民戦争』のまえがきで述べている。

“一五二五年と一八四八年～四九年の二つのドイツ革命の比較では、あまりにも近いものがあり…双方の場合、都市市民の登場という、おかしなほどの類似性がみられる…。(M・E全集 I 卷六〇八頁)”

ドイツ市民階級の裏切り行為の結果は《上から与えられた》ドイツの統一なのであった。(一八七一年)

一八四八年三月二十日のプロイセン政治犯特赦発令ののち、法的保護下でない故郷喪失者のこの詩人は、ピングェルブリュックへ行く。その翌年(一八四九年)詩人は姪の十八歳のイダ・ツム・ベルゲと結婚する。ところが、短い家庭生活という不幸に見舞われる。なぜなら、この若い夫人は、はやくも一八六〇年に第二子の死産後に亡くなってしまうのであった。ホフマンは孤独になった。

民主主義革命の不成功をもって詩人として公的生活下に役割を演じることを諦める。『ドイツ語・ドイツ文学そして芸術のためのワイマル年鑑』を刊行したワイマル滞在は、大いに彼を立腹させた。『非政治的詩集』の詩人である彼に反対する、ワイマル大公とは折り合う人たちと対決したからだった。

こんなことから、一八六〇年にヴェーザー河畔のコルバイ城の図書館司書へのすすめに、すぐに応じた。同年、自叙伝『わが人生』を書き始める。これは一八六八年に六巻で刊行される。民主主義、正義、自由の敵と闘いつつ、一八七四年一月十九日コルバイで二度目の心臓発作にみまわれ逝去する。詩人はプロレタリアートの歴史的役割を一度も正当に認めることはなかった。一八七一年後の資本主義経済を批判した時でさえ、そうであったが、しかし自分の『非政治的詩集』を、一八四八年の革命を用意するように寄与しようとした。今日でも再び、彼の「ときの詩」は活力を得ている。なぜなら、その詩が祖国統一をめぐる輪のなかでドイツの人々を支えているからである。

ドイツ国家^{Nation}の存亡が問題となっている、まさしくわれわれの今日において、詩人の要求を最終的に実現することに関わるからだ。

“ドイツよ まず ひとつにまとまるがよい！
きみたちが 願い 望み そして思うことを
すべて 一切 消し去れ
他のことは おのずと 見つかるだろう

ドイツよ まず ひとつにまとまるがよい！
美しい日の 出現を
得ようと 努力するがよい
その日が ついに 統一を われらにもたらしてくれる”(訳注：B-p.33,34)

参考文献

- A Materialien zur Geschichte der deutschen Nationalhymne Colloquium Verlag Berlin 1990
- B Unpolitische Lieder und Zeitgedichte Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig 1953
- C August Heinrich Hoffmann von Fallersleben Ingrid Heinrich-Jost, Stepp Verlag 1882
- D Hoffmann von Fallersleben Gedichte und Lieder Hffmann und Campe Verlag, Hamburg 1974
- E Mein Leben Contumax Berlin 2010
- F Siedler Deutsche Geschichte Heinrich Lutz zwischen Habsburg und Preussen 1994
- G 世界名詩集大成 古代・中世篇 平凡社 1960